アシュラム ASHRAM

2018. 9月第598号

発行所　アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp

編　集　アシュラム誌編集委員会

振　替　01050-6-53772
アシュラムセンター

印　刷　明文舎印刷商事（株）

解題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもってみ前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

一昨年アシュラム誌「みことば」の欄を担当してくださった香西信先生の通信の中で、この「とどまる」という言葉についての大変興味深い注解を読んだことがある。「『とどまる』という日本語のニュアンスはとても大切です。これは英語で言うと『abide in』です。これは『そこにずっといる』とか『住む』といった意味を持ちます。メノー（とどまる）は英語の別の訳の「continue」のニュアンスも含みます。つまり一時的なものではなく持続的です。このことがわたしたちの信仰に大事な意味を持ちます。」（マラナタ誌第12号）彼はこう書き、続けて、無教会の聖書学者黒崎幸吉先生の言葉を引用し、キリスト教信仰には一次的な宗教的熱狂ではなく、それぞれの内に住む聖霊によって日々の生活を通し、静かに満たされる「霊的交通」を持ち続けていくことの大切さを説いておられた。

ヨハネ福音書、そしてヨハネの手紙の中で頻繁に使われる、このメノーというギリシャ語は、あの有名な、ヨハネ15章のぶどうの木とその枝のたとえの中でも使われており、「つながる」や「内にある」とも訳されているのだそうだ。「ぶどうの枝が、木につながっている」（ヨハネ15：4）ことも、「私の言葉がいつもあなたがたの内にある」（ヨハネ15：7）ことも、それらは皆、「とどまる」ことがとどまり続けることであるように、つながり続けることであり、内にあり続けるという持続するものなのだ。まさに、私たちアシュラム運動が目指す、神との霊的交わりの時である「密室運動」こそが、執着するものであるとするならば、それは霊的宗教的熱狂と呼ばれるものとなんら変わらない危険なものとなってしまうのではないか。そこに、ヨハネの手紙の著者が、「神は愛です。神の愛にとどまる人は」と書いた所以なのではないだろうか。神の愛にとどまるとは、このすべてのものを愛したもう神の愛の内に私がとどまり続け、つながり続ぶどうの木につながることも、神の内にあることも、不可能なのではないか。そんな思いで胸が潰れそうになる。けれどもそんな時、私はヨハネの黙示録の言葉を思い起こす。「目を覚ませ。死にかけている残りの者たちを強めよ。あなたの行いが、私の神の前に完全なものとは認めない。だから、どのように受け、また聞いたか思い起こして、それを守り抜き、かつ悔い改めよ。」（黙3：2）

そうなのだ、私は、完全なものなどではない。惜しみなく与え続けたマザーテレサの愛や、自分を殴りつけ、命まで奪おうとする敵をも愛したキング牧師ほどの愛などない。けれども、それらがどこから来て、どうなったかを思い起こすことはできるのだ。私たちは皆この死にかけているような愛なき不完全な者に過ぎない。けれども、そんな私たちに、目を覚ませ、悔い改めよと声が響くのだ。友よ、私たちはとどまり続けようよ、神はとどまった者にとどまってくださるのではなく、とどまり続けようとした者にとどまってくださるのだから。今日愛せなかったなら、明日愛そうよ。そしてこの朝も神の愛にとどまり続けようよ。

瞑想

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

Ⅰヨハネ4：16

主幹牧師　榎本　恵

神の内にとどまり続けることであり、つながり続けることであり、内にあり続けるものなのだと私は確信する。すなわち朝早く、一人静かに聖書を読み、祈り黙想するときこそ、私たちにとって至福の神との「霊的交通」の時であることに私も同意する。

だがしかし、それがもし、ただ自分たちの霊的恍惚感や、ストレスからの解放や朝の清々しさや心地よさにのみ、私のうちがその愛で満たされ続けていくことなのである。

しかしながら実際の私はというと、電車の中で、席を譲ることさえも厭うような愛なき者にしかすぎない。そんな私が、どうして敵を愛せよと命じ、右の頬を打たれたら、左の頬を向けよと言う程の神の愛にとどまることなどできようか。所詮この愛なき者には、神の愛にとどまることも、

静まりの世界への主の御導き（2）

証　唄野隆・絢子ご夫妻
（堺大浜キリスト教会）

その夜、指定された地下室で待っていると、先生が来られて、開口一番、「君は生まれ変わりがはっきりしていないね。」受洗後4年経ち、青年会の書記、教会学校の教師もしていた私は、どう答えてよいか分からず、黙っていた。私が黙っていると、蔦田先生が、「僕はシンガポールの日本人教会の長老の息子でね、青年会の書記をしていたとき、聖書によって罪を示され、その罪を告白して生まれ変わったんだよ。」と言われた。そのとき、シンガポール生まれで、教会役員の子で、青年会の書記をしていた私の心はすっと開いた。先生は、1ヨハネ1：9「もし己れの罪を言い表わさば、神は真にして義しければ、罪を赦し、凡ての不義よりきよめ給わん。」という聖書のことばを読ませ、「一般的な罪の許しを求める祈りはするが、具体的に一つ一つの罪の告白はしたことがないだろう。今してごらん。」と言われた。一つか二つ告白し始めると、「これから先は神さまと君との取引だからね。僕は関係ない。失敬する。」と言って、行ってしまわれた。1時間以上祈ったと思う。聖なる神を前にした初めての経験だった。思い出す限りの罪をすべて告白し終えたとき、「汝の罪、赦されたり。」との御声を聞いたように思った。そのとき、キリストの復活はそのまま信じていることに気づいた。心に喜びといのちの躍動を感じた。部屋に帰ると、ルーム・マスターの山口昇神学生（当時）が待っていて、「祈っていたよ。」と言ってくれた。次の日の朝、高橋さんに「昨日、聖書全巻、通読したようなことを言ったのは嘘で、実はこうこうだった。」と告白し、一緒に祈ってもらった。証会があり、昨夜のことを証したら、リーダーの尾山令二神学生（当時）が「去年、関西にいったとき君に会って、おかしな信仰だと思ったから、そのときから祈っていた。」と言ってくれた。村瀬俊夫先生もそのときいっしょだった。彼らとは、その後、親しくお交わりをいただくことになった。主の前に一人立ったとき、深い交わりが生まれたのである。

この夏期学校は、私にとっては霊の誕生の場であったが、もう一つ、「静思の時」を教えられたことがその後の信仰生活に大きな意味をもった。KGKでは、毎朝まず聖書を開き、みことばを聞き、思いめぐらし、祈るように、教えられた。最初は聖書を読んで「理解する」ことに偏ってはいたが、やがて聖書のことばを主からのみことばとして受け、主の語りかけを聴き、それに応え、主と交わり、主御自身を知っていく世界への門が開けた。それは私たちの生活の中に聖なるものを受け入れる道であった。後に、主の前に静まることについて深い導きを与えてくれたハンス・ビュルキ先生はよく「あなたの生活に聖なるものがあるか。」と問いかけられたが、聖とは、日常を超えた神と関わる世界のこと、主のために特別に選び分たれたものを聖別されたものと言う。聖なる御方との出会いは主が与えてくださるときに起こることであり、人の側から招き寄せるものではない。しかし、私たちは主のために選び分たれた時と場所、聖日礼拝、朝ごとの静思の時を聖別し、聖なる主との出会いに備えることはできるし、必要である。KGKでは、個人生活では静思の時を教えられたが、学内での活動は週ごとの聖書研究会（Weekly Bible Study、略してWBS）を基礎とするように導かれ、そのための準備として、帰納的聖書研究法（Inductive Bible Study）による聖書研究を教えられた。それは、事実の収集、解釈、適用から成る。事実の収集とは聖書に記録されていることをすべてそのまま確認するということ。たとえ、アウグスチヌスやルター、カルヴァンであっても、人のことばによらず、ただ聖書のことばだけに基づいて、神のメッセージを聞こうとするのである。解釈は、聖書の語る事実の背景や出来事の経過、因果関係、語られる思想の論理的展開、詩篇などでは語る人の感情の動き、などを分析し解釈して理解しようとすること。そして、聖書の語るメッセージを頭の中の理解だけにとどめず、考えること、行動すること、感じることにまで浸透させ、生活全体が聖書のメッセージに応えるものになるようにつとめるのが適用である。帰納的聖書研究法は一つの聖書研究法だが、聖書のメッセージを正しく受けるための道を備える良き訓練となった。

（つづく）

アシュラム初参加の
1ファミリーの方々と

ご献金者
敬称略
6月分
金山　良雄
阪神
ミニアシュラム
村田　豊子
榊原喜三郎
中谷　哲造
沖田　朝子
鹿屋
キリスト教会
橋本るつ子
榎本　和子
植松喜美子
越智　千歳
上柿　京子
香川　孝子
佐賀　昭子
山田喜久子
吉田恵美子
正岡リツコ
原　香澄
鹿児島
キリストの教会
幡江美智子
片岡フジ子
川瀬　陽子
石井　美雪
引原　勝美
金田　健一
金田　和子
村瀬　俊夫
横山　宜和
今泉　晶久
白神　紀子
福岡聖書教室
吉川　禮子
森山　直子
三重アシュラム
伊達　平和
関東青年
アシュラム
山岡　義明
足立タヅ子
常任運営委員会
桶川聖書教会
教職アシュラム
引原　勝美
源内　正男
藤本　岩夫
センター
聖書教室
森山　俊輝
松本　直美
脇　萬里子
島　隆三
ちいろば
牧師記念
チャペル夕礼拝
瀬戸　昭
植松満里子

愛知一日アシュラムに参加して

小池　典子

初めて参加したので少し戸惑うかなと思ったりもしましたけどすぐにそんな心配はなくなりました。

アシュラムの成り立ちをメッセージの中でお聞きして、かつて榎本先生の一日一章を読んだことを思い出していました。

静かにみことばに聞く、みことばに向き合って主が語って下さるのを待つ。何度もくり返し読み心の中で祈りながら時を待つこととファミリーで互いにかかえている問題を分ち合い、共有し互いに祈り合いそこで支え合う、祈ることによってなぐさめと勇気と力を与えられることを教えられました。

この一日アシュラムが終わってもファミリーとして共に祈り合うことでお互いを支えあって日々を歩んでいく、そこにこそ主イエスが働いて下さって私たちひとりひとりを確かな道へと導いて下さることを教えられ感謝です。

あなたのみことばはわが足のともしび、わが道のひかりです。

私達クリスチャンにとって、このみことばは希望のひかりであると私達に語って下さっているように思えました。

どんな時も主にあって歩めますようにと祈りながら、そして感謝しつつ感謝文とさせて頂きます。

（日本バプテスト連盟名古屋キリスト教会）

札幌一日アシュラムの恵み

幡江美智子

昨年まで一日アシュラムを導いて下さいました岩波久一先生が埼玉にお帰りになられ、第八回目の今年は榎本恵先生をお迎えして開催することが出来ました。

ご案内を送付してから祈りつつ待ち、締め切り当日の申込者をもって定員三十名が満たされました恵み、アシュラムを大切に思いつつもご自身の体調や種々のご事情の中からギリギリの決断へ主がお働き下さったとの証しもお聞きすることも出来ました。

主題聖句「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは知らずに天使たちをもてなしました。」のもと「ヘブライ人への手紙十二章、十三章」を静聴しました。

巻頭言で、アシュラムを「気づかずにもてなす」時としましょうと書いてくださり、オリエンテーションでは、どんな人をも平等にもてなして下さる神の最高のもてなしと招きをみ言葉に聴くように、そして「主の足元に座って、その話に聞き入っていた。」マリアの姿こそ主のもてなしを受ける最高の姿と示してくださいました。

私たち自身が旅人であり、日々出会う人々も旅人ですから、その出会いの中で、「もてなすとは？」「どのように？」と具体的なみ言葉に答えを示されたいと願っていました私ですが、純粋に主の話に聞き入り、主の哀れみと恵みと主の愛を受けることがマリアの切

沖田　和恵
大阪聖書教室
井上　明
井上讃美子
持田　澄子
榎本　恵
榎本　康子
湯野　静子
久田　雄治
吉田すみゑ
米田　康子
米田　歌子
静岡聖書教室
池谷　治朗
安仲　萌子
東京聖書教室
チャイム・コンソート（池田チャイムの会）
カフェちいろば　聖書入門講座
大山　悠子
堺大浜キリスト教会
桶川聖書教会
榎本　光太
鹿屋キリスト教会
71口
¥2,913,284

ヨセフ基金（義援金）
吉田すみゑ
ちいろば
アッちゃん・シュラム君
2口
¥5,000

新修道場のために
たぴんちゅ牧師
1口

合　計
74口
¥2,920,284

尊いご献金、ご献品、お祈り、お便り、電話メッセージ、そして、共にアシュラム！感謝いたします

望していたことであり、そのことこそ主が望んでおられることであり、そしてそれがマリアの精一杯の主へのもてなしの姿であると示されました。

朝ごとにみ言葉を聴き、主の愛を求めるレビの時こそ主のもてなしを受ける恵みの時、その喜びを共有するファミリーを覚えて祈り合うアシュラムの交わりこそ主からのもてなしの恵みであること、そして共にいてくださる主の愛を出会う旅人に伝える前に、ただその人と共にいること、語られる話に耳を傾けること、心を込めて祈ること。

アシュラムの大切さを改めて確認させていただきました。

短い時間でしたが、六名のファミリーと恵みを分かち合い、互いにもてなし合えた恵みを感謝しています。

（月寒教会）

加太アシュラムに参加して

竹田こまき

主題聖句は「私についてきなさい。人間をとる漁師にしよう。」（マルコ1：17）であった。黒田朔師は『人は本気で従うとき恐れるが、主がともにおり主が漁師として用いるので心配は無用。網は漁につかうもので繕うだけではだめ、多くの人が繕ってばかりでもう立派な刺繍まで網に施している。』とおっしゃった。

毎年春になると、西川実行委員長からお誘いのお手紙を頂いていたが、嫁ぎ先は無宗教で舅姑と同居しているし、休暇もとりにくいし、と十年間もご無沙汰していた私はまさに網を繕い、さらに刺繍を施していたのだ。

2回の早天は伊野広子師より認知症からアプローチしたキリスト者の幸いを、寺尾雅生師は詳細なレジュメをもとに聖霊の語源解釈をし、聖霊の臨在は創世記2章でアダムがエバと初対面したときの喜びと同じという刮目すべき説教をしてくださった。

参加直前に母に腎臓疾患の疑いがあるといわれ、すこし気落ちしながらの参加であったが、初日の夜、ファミリーで集まったときに腎臓が悪い方がおられ、塩分と高たんぱくな食事に気をつければ大丈夫というお話を聞き、ヨハネ第1の手紙を通しての分ち合いでは交わりの大切さと愛には行動が伴うという励ましを受けつつ、主はすべてをご存知の上で私をここに導かれたのだなあという思いを強くした。実行委員の皆様、本当にすばらしいアシュラムでした。神様の備えてくださった、すばらしい出会いに感謝しつつ。

あとがき

まだまだ今年の酷暑が続いている。暑さの中で、悲鳴をあげるヨナに語られた主の言葉を思う。「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか」（ヨナ4：9）それが正しいことかどうか、いつもその視点でものを見なければならない。しかも、自分の正しさではなく、神の眼に映る正しさとして。気象のことから政治、経済、国際情勢まで、悲鳴をあげるようなことばかりが続いているが、いつも主の目に映る正しさを見ていくものでありたい。沖縄の一人の政治家が天に召された。どうか、この島に本当の正義と平和が訪れますように。

（恵）

天上の友お一人ずつとの繋がりを語る和子母（自身も遺族）

アシュラム修道場生活記 その19
「修道場①」

伊達　平和

相変わらず住人の流動性の高いアシュラムセンター修道場である。先月、長野の共働学舎からやってきた筆者の妹チエとその友達ハーナーだが、１ヶ月あまりの滞在を経て二人とも沖縄に旅立った。そういえば報告していなかったが、トッシーはいつの間にか６月から沖縄の伊江島で引きこもっている。先日昼間に「なにしてるん？」と電話できくと「休んでます」と返事があった。そして「じゃあ午前中は何してたん」ときくと「ゴロゴロしていました」と返事があった。なんとも羨ましい生活である。羨ましさを通り越して妬ましい。そろそろ今後どうするのかじっくり考えさせるため、自分も沖縄に行ってそのまま連れて帰ってくることにした（決して妬ましさが故の行動ではない）。

というわけで、８月の修道場はコウチャンと筆者の２名である。コウチャンは榎本邸もあるためか、帰ってこないこともあるので、この広い修道場（２階建て５LDK）をほぼ１人で使っている。一時期は６名までいた修道場である。１人で住んでいるとがらんとしていて、どことなく寂しい。まあもともと１人で始まった修道場生活だから、「こんなもんか」と思って、今は１人の気楽さを楽しんでいる。そうこうしているうちに、沖縄からトッシーが帰ってきたり、ソラくんとモモちゃんとハルちゃんが来たり、そしてまだ見ぬ誰かが来たり…と、修道場はこれからも「人生の旅人」の中継地点としてその役割を果たしていくのだろう。

人がいなくなった節目にあたって、今回はあらためてアシュラムセンター修道場のことを考えてみたい。この修道場は、1977年に昇天した榎本保郎牧師が、これからのキリスト教会を担っていく若い神学生のため、学問的な訓練の場ではなく、霊的な訓練の場となることを願って設立したと和子先生から聞いている。残念ながら保郎先生は、その直後にロサンゼルスで没したが「この修道場を使ってアシュラムをしたんだよ」という話をたまに聞くと、保郎先生の思いがずっと受け継がれてきたということをひしひしと感じる。

「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」（ヘブライ人への手紙13章２節）。この聖句は先日センター主催で開催された福岡１日アシュラムでの主題聖句であった。福岡は筆者の故郷なので、中心となって参加し、運営にあたったが、この聖句から筆者は「主催アシュラムであれ、修道場であれ、いつ誰が訪ねてきてももてなすことが出来るように準備をしておきなさい」と言われているような気がした。

老朽化がすすみ、雨漏りや天井に穴が開くなどボロボロになった修道場だが、それでもいまなお旅人が訪れている。今度はどんな人が来るのか、男性か、女性か、それともそれ以外か。学生か、青年か、高齢者か。きっとそれぞれが、それぞれの「ワケ」を持って、人生を旅しているのだろう。いつ誰が来ても良いように、今の古い修道場がその役割を終える日まで旅人をもてなし続けることができるように、そして学生のみならず、修道場につながる人々が、「霊的な訓練」を受けることができるように、これからも日々整えようと思っている。アシュラムセンターで朝の６時から行われている早天祈祷会は、土曜日は修道場が会場である。修道生たちがおもてなしをするので、訪ねていただけると幸いである。

最後に、この場を借りて、修道場の雨漏りの修理、木の剪定など、筆者の手の届かないところをボランティアで整備くださるアシュラムの友の皆さまに感謝を申し上げる。いつも本当にありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願いします。

伊達ファミリー勢揃い！御父、ご来訪。和みのひとときを（福岡アシュラムの友）

●先月号の「ハルちゃん」を「長男」と表記していましたが、正しくは「長女」です。お詫びしてここに訂正致します。

9月の聖書教室など

6㈭	常任運営委員会（アシュラムセンター）
7㈮	阪神ミニアシュラム（主恩教会 PM1:00）
10㈪	福岡聖書教室（博多クリオコートホテル PM1:30）
18㈫	大阪聖書教室（大阪クリスチャンセンター AM10:30）
19㈬	カフェちいろば聖書入門講座（京都・伏見区深草 PM1:30）
20㈭	新さん祈りの家（滋賀県湖南市 AM10:00）
21㈮	センター聖書教室（アシュラムセンター AM11:00）
23㈰	ちいろば牧師記念チャペル夕礼拝・愛餐会（PM5:00）
24㈪	静岡聖書教室（旧・英和女学院宣教師館 PM2:00）
25㈫	東京聖書教室（御茶ノ水クリスチャンセンター 4F AM10:30）
25㈫	桜美林リトリートアシュラム（桜美林大学荊冠 PM2:30）

9月のアシュラムなど

14㈮～15㈯	新潟一泊アシュラム（メイワサンピア） 奉仕者　榎本恵師	0250－23－2697 吉澤昭男師
16㈰～17㈪	第53回 九州アシュラム（福岡　黙想の家） 奉仕者　榎本恵師	097－522－2768 岡山敦彦師
24㈪	第27回 福島浜通りアシュラム（原町聖書教会） 奉仕者　石黒　實師	0244－23－1199 石黒　實師
26㈬～27㈭～28㈮	第６回 日光オリーブの里アシュラム 28日(金)自由参加ツアー 奉仕者　榎本恵師	0748－33－4030 アシュラムセンター

10月のアシュラム予定

1㈪～2㈫	第42回 山陰アシュラム 奉仕者　榎本恵師	0854－22－2496 遠藤誠一師
5㈮～6㈯	第23回 北陸・富山アシュラム 奉仕者　加々美　要師	0767－22－5142 岩城輝雄兄
8㈪(祝)	第8回 岩松アシュラム 奉仕者　新垣達也師	0895－32－2114 新垣由子師
16㈫	第22回 埼玉一日アシュラム 奉仕者　岩波久一師	048－726－2208 秋山信夫師
26㈮～27㈯	第19回 愛知一泊アシュラム 奉仕者　岩波久一師	0562－47－0528 溝口勝幸師

11月以降のアシュラム予定

11月5～6日	第39回 札幌アシュラム
11月14～16日	第42回 阪神アシュラム
11月20～22日	第43回 京浜アシュラム
11月30日	合同平和祈祷会inアシュラムセンター
12月8日	センタークリスマス礼拝・愛餐会・フリーマーケット
2019年 1月24～26日	第44回 年頭アシュラム

榎本てる子師、信徒の友９月号に掲載されました。他、各紙、各場所で　活躍中！

みことば

下妻シャロームキリスト教会牧師
山本　悦子

列王紀上17章18章
「従　順」

「数年の間、露も降らず、雨も降らないであろう」エリヤはアハブに告げました。果たしてそのようになりました。3年に及ぶ干魃は深刻で多くの者が命を失いました。

エリヤはどの様に命ながらえたのか。エリヤから可能性を次々に奪って、もはやこれまでという時、驚くことに毎日、鳥が食物を運び、やもめに助けられます。やもめの所では、すっかり食物がなくなり餓死寸前の親子に主は驚くことに「壺の粉は尽きることなく瓶の油はなくならない」と告げました。エリヤは主の言葉に徹頭徹尾従順でした。

この物語は信仰への到達と、私たちが神のために選択をなしうることを劇的に描写しています。人間の信仰は、試練に耐えさせ、その忍耐によって私たちの心を転換させようとする、神の前もっての積極性に依存するものです。神が信仰を生み出すのであります。信仰とは人間の自由な選択の問題ではなく、神の公然たる働きなのです。エリヤは神の僕であり、不思議を行う英雄ではなく、むしろ、祈りを捧げ、従順を示されたのです。信仰は従うことの訓練です。

従順の最たるはイエス様です。「わが神、わが神、何ゆえわたしをお見捨てになるのですか」「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているか知らないのです」こうしてカルバリの丘を鮮血で染めたのです。

「父がお与えになった杯は飲むべきではないか」「み心がなりますように」と。この従順こそが全人類を救われるためのものです。

天上の友を憶える日礼拝